

●優秀賞

意欲的に表現する子どもを育てる 図画工作科指導

新潟大学教育学部附属新潟小学校 ながいたかし 永井高志

1 主題設定の理由

今後の教育のあり方の基本的な方向として、生涯学習の視点に立ち、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることが重要とされた。この資質や能力を備えた子どもを、私は図画工作科では、「対象に積極的にかかわり、想像力をはたらかせて表したいことを豊かにふくらませ、自己実現する子ども」ととらえた。ここでいう「自己実現する」とは、自分なりの表現の仕方、自分なりに感じたり、考えたり、想像したりした色や形で表現できた姿を意味する。

これまでの私の図画工作科「表したいことを絵や立体に表す」指導における子どもの姿を見ると、次のような問題点が挙げられる。

- ① 題材に対して自分なりのイメージが持てず、意欲的に描こうとしない。
- ② 自分なりのイメージが持てても、それを豊かにふくらませることができず、結局、人のまねになりがちである。
- ③ 自分なりのイメージを画面上に思うように表現できず、満足できないまま表現を終えてしまっている。

このことは、私の指導の不十分さにも原因がある。そこで、題材に対する「自分の思い」を豊かにふくらませ、それを自分なりの表現の仕方、主体的に表現する子どもを育てたいと考えた。

ここでいう「自分の思い」とは、思ったこ

とや感じたこと、考えたことであり、子どもらしい感受性や着想、発想によったり、想像力をはたらかせたりして、子どもの心に生じた心象のことである。そして、この子どもを育てるために、どのように対象とかかわらせればよいか、「自分の思い」を豊かにふくらませて、それを自分なりの表現の仕方、表現させるにはどのような指導を行えばよいかを明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

3年生の「表したいことを絵や立体に表す」学習において実践を試みた。

2 研究の仮説

他教科等の学習内容と関連した創造的想像表現を促す題材を設定し、「自分の思い」を豊かにふくらませるとともに、個々の子どもの状況に応じた支援を行えば、子どもは、主体的に表現し、自己実現できるであろう。

3 研究の手立て

(1) 表現に対する意欲を持ち、「自分の思い」が持てる題材の設定

他教科等の学習内容と関連した題材を設定する。他教科の学習で得た知識や感動、驚きなどを生かして、創造的想像表現を促す題材を設定する。このことで、中学年の子どもの豊かな想像力を刺激することができ、表現に対する意欲を高め、子どもが「自分の思い」を持つことができると考えた。

(2) 「自分の思い」を豊かにふくらませるための手立ての考案

子どもが題材に対する「自分の思い」を持つことができても、それはまだ色や形がはっきりとしたものにはなっていないことが多い。そこで、描きたいことを具体的な色や形に置き換えさせるために「言葉のスケッチ」や「ラフスケッチ」などを考え、取り組ませることが有効であろうと考えた。

(3) 自己実現を促す支援の構想

子どもが「自分の思い」を豊かにふくらませることができても、それを思うままに表現できないために意欲を失い、作品として自分なりに満足できないままに終えていることがある。そこで、個々の子どもの状況に応じた支援を行う。このことで、子どもが主体的にどのように表現するのかを判断し、自分なりの表現の仕方でも表現を進め、自己実現できると考える。

4 授業の計画

題材名「ドン山物語」

(3年「表したいことを絵や立体に表す」)

(1) 題材設定の理由

ドン山は、学校に隣接した通称「ははの森」にある小高い丘である。大正時代初期、ここに大砲を据えつけ、正午を知らせるために海に向けて空砲を撃った。その音にちなんで、ここを「ドン山」と呼んだ。子どもたちは、生活科の学習その他でドン山を訪れていて、なじみ深い場所である。しかし、子どもたちはドン山の名前は知っているが、由来やそれにまつわる詳細をほとんど知らない。

そこで、社会科単元「まちのむかしをみつこう」の学習で、ドン山に関して子どもたちの興味・関心に基づいた調べ活動を組織する。ドン山を中心に自分をはぐくんでく

る地域の自然、風土、歴史を理解させたいので、ドン山を主題とした自分なりの物語を絵画として表現させることで、子どもは想像力をはたらかせて自分なりのイメージを豊かにふくらませ、自分なりの表現の仕方でも表現できるであろうと考え、この題材を設定した。

(2) 指導目標および指導計画

指導目標は次のとおりである。

- ① 身近な地域の過去や未来を想像して自分なりの「ドン山物語」を創作し、その様子を想像して進んで表現しようとする。
(造形への関心・意欲・態度)
 - ② 表したい場面のイメージを豊かにふくらませ、「自分の思い」がよく表れるように必要なものを画面にどのように描くかを考える。
(発想や構想の能力)
 - ③ 自分なりの表現の仕方でも自分なりに感じたり、考えたり、想像したりした色や形で表現する。
(創造的な技能)
 - ④ 自他の作品のよさや工夫を見つけ、作品を大切にする。
(鑑賞の能力)
- 指導計画を資料1に示す。

5 学習指導の実際

(1) ドン山の歴史を知る

本題材を社会科の学習内容と関連づけて、学習する題材として位置づけた。

社会科単元「まちのむかしをみつこう」の学習で、子どもは、学校や各家庭にある昔の生活道具を探す活動に取り組んだ。そして、それらの道具が使われていたころの暮らしの様子などを両親や祖父母、地域のお年寄りなどに聞いたり、郷土資料館に出かけて調べたりした。そして、現在までの道具や暮らしの様子の移り変わりを絵年表にまとめた。

このことからさらに発展させ、「今の町の中にも昔の町の様子を知る手がかりになるものはないだろうか。」と問いかけた。すぐさ

資料1 指導計画（指導時間 8時間）

	学習活動	教師のはたらきかけ	評価
着想 0.5	○ドン山の過去や未来を想像して、自分なりの「ドン山物語」を創作する。 ○絵に表したい場面を決める。	○社会科単元「まちのむかしをみつけよう」の学習の発展として、地域にあるドン山の歴史調べを通して、自分なりの「ドン山物語」を創作するよう促す。 ○創作した物語をもとに表したい場面を決めて、その様子を絵に表すよう促す。	・物語を創作し、その様子を想像して、進んで表現しようとしているか。表情、つぶやき、態度から評価する。 (造形への関心・意欲・態度)
発想 0.5	○表したい場面のイメージを豊かにふくらませたり、はっきりさせたりする。	○「言葉のスケッチ」に取り組ませる。 ・表したいことの色や形、様子、表したいことに寄せる思いを、具体的に記述させる。	・表したい場面のイメージを豊かにふくらませることができたか。「言葉のスケッチ」の記述から評価する。 (発想や構想の能力)
構想 1	○必要なものを画面にどのように描くかを考える。	○表したいことの一つ一つを、更紙に「ラフスケッチ」させる。 ・大まかに「ラフスケッチ」させ、それらを組み合わせることで、作品のイメージをつかませる。	・「自分の思い」がよく表れるように、必要なものを画面にどのように描くかを考えることができたか。「言葉のスケッチ」の記述、「ラフスケッチ」などの表現から、評価する。 (発想や構想の能力)
表現 5	○描画材料を選ぶ。 〔画用紙〕 ・コットン紙 ・ワトソン紙 ・マーメイド紙 ・キャンバス紙 〔線描材〕 ・水性ペン ・油性ペン ・黒色鉛筆 ○自分なりに感じたり、考えたり、想像したりした色や形で表現する。 〔描材〕 ・水彩絵の具 ・クレヨン ・色鉛筆など	○発色の効果を考え、画用紙を選択させる。 ○彩色後、線が見えるようにしたいのかを考えて、線描材を選択させる。 ○「自分の思い」の表現に取り組ませる。 ・色による表現では、水彩絵の具を主に、表現意図に応じて、クレヨン・色鉛筆などを選ばせる。 ○表現の仕方に行き詰まっている子どもに支援を行う。「支援カード」を用い、自己選択させる。 ・「ものの位置」「遠近」「形」「動勢」「大きさ」「色彩」「空間処理」の、それぞれの表現の仕方の行き詰まりに応じた支援を行う。 ○表現の仕方に行き詰っていない子どもには、その表現のよさをとらえて賞賛したり子どもなりの表現の仕方のおもしろさや工夫に共感したりする。 ○支援によって表現の仕方の行き詰まりが解決でき、自分なりの表現の仕方自分なりに感じたり、考えたり、想像したりした色や形で表現できた姿を賞賛する。	・表したいことに合わせて画用紙や線描材を選択できたか。姿、表現から評価する。 (創造的な能力) ・自分なりの表現の仕方自己実現できたか。発言、つぶやき、姿、表現から評価する。 (創造的な技能)
鑑賞 1	○鑑賞する。	○自他の作品のよさや工夫を見つけさせる。	・自他の作品のよさや工夫をみつけ、作品を大切にしているか。「鑑賞カード」、発言、つぶやきから評価する。 (鑑賞の能力)

資料2 ドン山に関して学んだこと

- ① 150年ほど前、人々は鐘の音で時間を知った。
- ② 100年ほど前、兵営所が作られたことと、「時間を知らせる音を、鐘から号砲にしては。」という意見があり、毎正午に大砲（空砲）を撃って正午を知らせることになった。大砲は、初め寄居砂山に置かれた。海に近く、松の並木だけが目につく寂しい場所であった。そこに官立の新潟高等学校が建設されることとなり、大正8年に西船見町の小高い丘に移された。そこは、ますます海に近く、松並木の中にあった。寄居砂山も西船見町の小高い丘もどちらもドン山と呼ばれ、人々に親しまれた。
- ③ 初め旧式の大砲を使ったが、明治29年から野戦重砲が使われた。空砲は初め市内に向けて撃ったが、二葉中学校ができ、海に向けて撃った。その音は風向きによって、30km離れた新発田でも聞こえた。
- ④ 明治22年までの16年間は、砲手は不明である。明治38年に大野勇八が砲手になる。この人は、ドン山から2km離れた東堀前通りで紋屋の仕事をしていた。仕事から家にいることが多く、健康のことも考えて、砲手の仕事を引き受けた。まじめで責任感が強く、健康な人であった。
- ⑤ 大野氏は午前10時に市役所に行き、火薬の引き換え券をもらう。中谷火薬店で火薬と引き換えた。新潟測候所（ドン山のすぐ近く）まで来ると、持参した市貸与の懐中時計を取り出し、測候所の大時計の時間に合わせた。一日一回大砲を撃つとはいえ、雨の日や大雪が降って道ははっきりしない日も休めない、大変な仕事だった。
- ⑥ ドン山に着くと、小屋から藁一束を取り出し、砲口から火薬とともに詰める。40cmの竹の棒の先の火縄にマッチで着火する。導火口の近くに火縄を持って行き、時計を見て、正午に導火薬に着火する。砲口からものすごい火の玉が飛び出し、白煙が辺りを閉ざし、地面が振動した。また、大砲を撃つ時に耳栓をしないと、一日中もうろうとして、意識がはっきりしなかった。
- ⑦ 付近の住人は大迷惑をしていた。砲口を海に向けて撃ったこと、火薬の量を半分にしたことで音が聞き取りにくくなった。また、当時の市会議員の白勢二朗氏が「報時塔にしては」と議会で述べ、今上天皇の成婚記念により報時塔が作られ、大正13年に大砲を撃つことをやめた。現在、ドン山に大砲の車輪部分が残され、記念となっている。

ま「ドン山」という声が聞かれたので、子どもたちとドン山に出かけた。ドン山には説明の案内板がある。書かれている内容が3年生にはやや難しいので、解説を加えながら子どもにも読み聞かせた。分かったことをもとに、さらに調べたいことを問うた。子どもたちは、次のような調べたいことを発表した。

- ① なぜここに大砲を置いたのか。
- ② 毎日大砲を撃った人はどんな人か。その人はどこに住んでいたのか。
- ③ 大砲を撃つのに困ったことはあったのか。それはどんなことか。
- ④ どうして正午が分かったのか。
- ⑤ なぜ大砲を撃つのをやめてしまったのか。

実行可能な方法で1週間ほど調べてみるように提案した。子どもたちの調べ方は多様であった。両親や祖父母はもちろん、近所のお年寄りというお年寄りに尋ねてまわった子ども、休日に公民館の図書室に行き、本で調べ

た子ども、郷土資料館に行き、職員に尋ねた子ども、市役所の広報課に電話して尋ねた子どもがいた。私自身も郷土資料館に出かけ、ドン山の歴史に関する文献（『にいがた時報物語』富山富一著）を紹介してもらった。私と同様に『にいがた時報物語』をもとに調べた子どもが数名いた。

1週間後、子どもたちが調べてきたことと私が調べたこととを突き合わせて、7点のことについて学び合った（資料2）。ドン山に対する子どもたちの親近感や興味・関心はいつそう高まったと、その態度や表情から感じた。

(2) ドン山物語を創作する

調べたことや学んだドン山の歴史をもとに、自分だけのドン山物語を創作することを提案した。「ドン山の昔や未来の様子、ドン山でどのようなことがしたいかなどを想像して、お話を作りましょう。」と促した。創作の時

間は2時間としたが、どの子どもも一気に書き上げた(資料3)。

(3) 必要なものを画面にどのように描くかを考える

資料3 KK子の 「ドン山物語」

わたしはベッドでねていた。「おきな、おきな。」とだれかにおこされた。おきてみるとそこは……、かこだった。なぜかよこにいた人がだれだかわかった。大野勇八さんだ。知らないうちにかこに来ていた。大野さんが、「さあ行くか。」と言った。時間は10時だった。家の中は今とちがってびっくりしたが、外はもっとびっくりした。今のように道は広くないし、数も少ない。

大野さんの後を歩いて行くと、市役所に来た。少したって、大野さんが紙のふくろを持って出てきた。火薬と書いてあった。

今度はとても長く歩いた。とてもつかれた。でも、火薬を持って歩いている大野さんのほうがたいへんそうだった。わたしも、大野さんの後ろを歩き続けた。どれくらい歩き続けただろう。大野さんが止まった。そこに「ドン山入り口」というかんばんがあった。

さらに歩いて行くと広い所に来た。大ほうがあった。わたしは思わずしゃべりだした。「あれが、れいの大ほうですね。」「よく知っているね。これから大ほうをうちにいくんだ。」と言って、わたしに何かわたした。耳せんだった。わたしは、それを何に使うか知っていた。大野さんは「耳せんをして口をあけてね。」と言った。大野さんが火薬に火をつけると、「ドン」と大きな音がした。

帰り道、わたしはへとへとになりながら、大野さんの家に行った。2時半。わたしは、大野さんのふとんの中でねた。

「ジリジリジリ」とめざまし時計が鳴った。そこは、もとのわたしのへやのベッドだった。今までのことはゆめだったのだろうか。一つだけ、かこに行ってわすれていたことがあった。それは、大野さんに「ありがとう。」と言うことだった。

ドン山物語を創作しながら、子どもは、物語の場面の様子を絵に表すことを意識していた。そして、絵に表したい場面の様子を想像しているようであった。どの場面を絵に表すかを、みなスムーズに決めることができた。

資料4 言葉のスケッチ

言葉のスケッチ

名前 KN子

◎ だれが何をしているところですか。

わたしが大野さんとおしゃべりしている。大野さんは大ほうをうっている。

◎ 描きたいことについて、あなたはどのようなことを思ったのですか。

むかしにもどって 本当に大野さんと話をしたり、大ほうをうったりしてみたいと思いました。

◎ どのような様子を描きたいのですか。

大野さんが大ほうをうっている。海が見えて、海はゆうゆうとゆれているようすをかきたい。

◎ 描きたいことをどのように表しますか。

何を	こんな感じにしたいから	このような形で	このような色で
大ほう	大きくてどっしりしているかんじ。	むかしの大ほうのような形。	黒でこかく。
なみ	ゆうゆうとゆれているかんじ。	本もののなみのような形。	青い色で、うすかいったりこかいったりする。
木	まっすぐどっしりと立っているかんじ。	本ものの木の形。	木はうすいちゃ色で、はっぱはこいみどり色でかく。
草	ふしぎなかんじ。	ぎざぎざにとかけている形。	きれいな色でこかく。
すなはま	やわらかいかんじ。	本もののすなはまの形。	うすいき色でかく。
大野さん	やさしそうなかんじ。	むかしのきものをさている。	こい青い色でかく。
友だち	ようこんでいるかんじ。	大ほうをさわっている。	きれいな色でかく。
わたし	ようこんでいるかんじ。	立って大野さんと話をしている。	きれいな色でかく。

しかし、絵に表したいことが必ずしもイメージのはっきりとしたものにはなっていないこともあると考えた。そこで、「言葉のスケッチ」(資料4)や「ラフスケッチ」に取り組みさせた。これらの活動を通して、子どもは、表したいことを豊かにふくらませ、その色や形をはっきりさせた。また、ラフスケッチを組み合わせて「アイデアスケッチ」を描くように促したことで、「自分の思い」を表すために必要なものを画面にどのように表現するかを考え、決めることができた。

全員のアイデアスケッチが完成したところで、アドバイスの場を設けた。「描きたいこと」を短冊に言葉で書かせ、それとともに各自のアイデアスケッチを提示した。友達のアイデアスケッチを見て、「良いと思うこと」「もっとこうすると良いと思うこと」を「アドバイスカード」に書かせた(資料5)。アドバイスカードをもらった子どもは、自分の表現に自信を持ったり、自分の表現を見直したりした。

また、「図工カード」(資料6)を配布して、「自分のアイデアスケッチに満足していますか、それとも、満足できないことがありますか。」と問うた。さらに「満足できないことがある。」と記述した子どもには、「どこが満足できないのですか。満足できないことを、これからどうしていこうと考えていますか。」と問うた。

このアドバイスの場を設けたことが、子どもに友達の見方や感じ方、表し方に気づかせたり、自分の表現の実態を見つめさせ、自分の表現をよりよいものにするにはどのように表現したらよいかを考えさせるきっかけとなったりした。アイデアスケッチの段階でこのアドバイスの場を設けたことは、妥当であったと考える。画用紙に下絵を描き終えた段階では、せっかく良いアドバイスを受けたとしても直しようがなく、下絵の不十分さを指摘された子どもが、自信や意欲を失ってしまうことが十分に考えられる。しかし、アイデア

資料5 アドバイスカード

ア ド バ イ ス カ ー ド

MS子 KN子 さんへ

◎ ここはよい。

大ぼうがうまくなっているし、大野さんもうれしそうにわらっていて、きっとKN子さんがきたからうれしくてわらっていたと思います。

◎ ここは、もっとこうするとよい。

もっと海になみが立っているようにかいたほうがいい。

資料6 図工カード

図 工 カ ー ド

名 前 KN子

◎ アイデアスケッチについて、

- ・ これでもいいと思う。
- ◎ よいと思わないところがある。

◎ なぜ、よいと思えないのですか。どこがよいと思えないのですか。なぜ？

なんかいいけど、ぜんぜんかけないからです。

どこが？

海のなみがよくかけないから、よいと思えないからです。

◎ よいと思わないところを、これからどうしようと考えていますか。

どうしたらよいか わからないので先生にききます。

スケッチの段階であれば、表現の不十分さを指摘されても、その指摘を次の段階の表現に生かしていくことができ、よりよい表現が期待できるからである。

(4) 描画材を選ぶ

「自分の思い」を表すのに適した画用紙や描画材料を選ばせた。明るい感じにしたいのであればキャンバス画用紙やマーメイド画用紙を、暗い感じや夜空の感じにしたいのであれば黄ボール画用紙や暗い色の色画用紙などを選ぶように助言した。また、水彩絵の具で彩色した後も線が見えるようにしたいのであ

れば、油性ペンなどを使って線描するように助言した。

(5) 色や形で表現する

どの子どももアイデアスケッチをもとに、表現活動に意欲的に取り組んだ。アイデアスケッチに不満を感じつつも、どのように表現すればよいか分からず、困っている子どもがいた。その子どもに行き詰まりの状況を詳しく尋ねた。カルテに、その子どもの表現の仕方の行き詰まりの状況やその子どもに対する願い、具体的にどのように支援を行うのかを書き込んだ。

子どもが支援を自己選択できるように、「支援カード」を作成した（資料7）。カードに示した支援の具体的な内容は、今までの指導の経験から、子どもはどのような表現の仕方に行き詰まりやすいのかを明らかにし、それを子ども自身で解決させるために私が考案したものである。

「大野さんが大砲を撃っている。海が見えて、波がゆらゆらと揺れている様子を描きたい。」と考え表現していたKN子は、「波がゆらゆらと揺れている感じに描けない。」と訴えてきた。私はKN子に、「形」に関する表

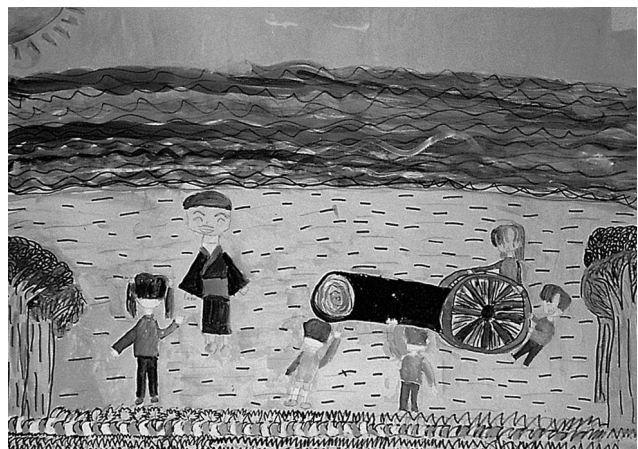
現の仕方の行き詰まりを解決させるための支援カードを示し、「この中から困っていることが解決できそうな方法を選んで、試してみましょう。」と支援した。KN子は、「図鑑などの絵や写真を見てかく」方法を選択し、図書室に資料を探しに行った。幾つか海の絵や写真を見つけたが、どれも自分の描きたい波のイメージに合わなかったようである。

KN子は再度訴えてきた。今一度支援カードを提示し、方法を選択させた。KN子は、「先生からアドバイスをもらおう」という方法を選択した。KN子がどのような波を描きたいと考えているのかをとらえていたので、KN子のイメージに合うような波を描いた参考作品（小学校中・高学年の子どもが描いた作品）をあらかじめ数枚探して準備し、それらを提示した。そして、「絵を見て、良い表し方だと思うことはどんなことですか。」と問うた。KN子は、幾つかの参考作品を指さしながら、「波を揺れているように描いているところが良い。遠い波と近い波の様子がよく分かる。波が丸いように描かれているところが良い。」と答えた。「見つけた良い表し方だと思うことの中で、あなたが困っていることを解決するのに役立ちそうなことはありますか。」と問うた。KN子は「はい。」と答えた。自分の描きたい波のイメージに合う参考作品

資料7 支援カード

支 援 カ ー ド （ 形 ）	
🗣️	先生からアドバイスをもらおう。
👁️	本物（実物）をみてかく。
📖	ずかんなどのえやしゃしんをみてかく。
✏️	なんまいもスケッチしてみて、「これだ」と思うものをかく。
👤	自分がかげずにこまっているものをかいている友だちのえをみてかく。

資料8 KN子の作品



を見つけたようである。その後KN子は、ゆらゆら揺れているような波を自分なりに表現していった。その後作品(資料8)から、KN子は「自分の思い」を自己実現できたと評価した。

「大野さんが大砲を撃ち、中にいたぼくと寛一が飛ばされた。ぼくは平気な顔をして、寛一がびっくりした顔をしている様子が描きたい。」と考え、表現していたMS男は、「真っすぐに伸びた感じの木が描きたいのだけれど、思うように描けない。感じが出ない。」と訴えてきた。私は、KN子と同様に、「形」に関する表現の仕方の行き詰まりを解決させるための支援カードをMS男に示し、「この中から、困っていることが解決できそうな方法を選んで試してみましょう。」と支援した。

MS男は「本物(実物)を見てかく」方法を選択し、画板と鉛筆、数枚の更紙(B5判)を持って、中庭へ描きたいイメージに合う木を探しに行った。直接画用紙に描かせると、思うように描けなかった場合、何度か消しゴムを使うであろう。そうすると画面が荒れるので、更紙に自分が描きたいと思う木が描けるまで、何枚でも描くように助言した。

MS男は何本か立っている木の中から、描きたいイメージに合う木を見つけ、それをよく見ながら更紙に丁寧に描いていった。しばらくして、納得のいく木が描けると教室に戻って来て、更紙に描いた木を画用紙に描いていった。熱心に描いている姿から、自分なりの表現に満足している様子がうかがわれた。その後作品から、MS男は、「自分の思い」を自己実現することができたと評価した。

KN子やMS男のように、本題材で表現の仕方に行き詰まった子どもは、38人中13人であった。この子どもたちの、表現の仕方に行き詰まった時に安易に妥協せず、「思うように描けない」と訴えてきた姿は、本当に描き

資料9 鑑賞カード

鑑賞(かんしょう)カード

名 前 KN子

◎ 自分の絵についてどのように思いますか。

① たいへんよくできたと思う。たいへんまんぞくしている。

2 よくできたと思う。まんぞくしている。

3 あまりよくできたと思わない。あまりまんぞくしていない。

4 ぜんぜんよくできたと思わない。ぜんぜんまんぞくしていない。

◎ あなたの絵に題名をつけてください。

大野さんと お話したよ。

◎ あなたの絵について、よくできたと思うこと、工夫したことを書きましょう。

なみを ゆらゆらとゆれているようにかくことができた。きれいな色でかいた。

◎ 友達の絵について、よいと思うこと、工夫していると思うことを見つけて書きましょう。

TM子 さんの絵について

にじを こくかいたりすくかいたりしているところがよかった。 ようすがよくわかる。

KK子 さんの絵について

自然の様子が出ています。 にじみを使っているところがよかった。

YK男 さんの絵について

いろいろそうぞうしたものがかいてあっておもしろいと思った。

たいことを納得いくまで追求する気持ちの表れと考える。このような姿こそ、主体的に表現活動に取り組む姿と考え、大切にしていかなければならないと思う。

表現しながら友達の表現に目を向け、表現の仕方の良いと思うことを積極的に自分の表現に取り入れる子どもの姿も見られた。子どもの間に無言のかかわり合いが生まれ、学び合いが生まれている。子どもが学級集団の中で学んでいる良さであると考え。

(6) 鑑賞

「鑑賞カード」(資料9)を配布して、自他の作品の表現の良さや表現の仕方の工夫を見つけ合う活動を提案した。「あなたの絵に題名をつけるとしたら、どんな題名をつけますか。なるべく短い言葉で題名をつけよう。」「あなたの絵で、よくできたと思うことや工

夫したことを見つけよう。」と提案し、カードに書かせた。その後、生活班ごとにグループ（各班4～6人の9グループ）を作った。「グループの友達に自分の絵でよくできたと思うこと、工夫したことを伝えよう。また友達の絵を見て、その絵の良いと思うことや工夫していると思うことを見つけて発表し、カードに書こう。」と提案した。このような場を設けることで、子どもは、お互いの作品の良さや表現の仕方の工夫を認め合うことができた。

6 実践を通じた成果と課題

(1) 成果

社会科の学習内容と関連づけ、創造的想像表現を促す題材を設定した。このことで子どもは、社会科の学習で得た知識や感動、驚きなどをもとに、題材に対して想像力をはたらかせて「自分の思い」を持つことができた。そして、言葉のスケッチやラフスケッチを通して「自分の思い」を豊かにふくらませ、その色や形をはっきりさせることができた。

子どもが「自分の思い」を豊かにふくらませ、その色や形をはっきりさせても、表現段階で思うように表現できず、意欲を失い、作品として自分なりに満足できないままに終わっていることがあった。そこで、描きたいことを思うまま表現できるようにするために、子どもの表現の仕方の行き詰まりの状況に応じた支援を、支援カードを活用して行った。このことで子どもは、描きたいことをどう表現すればよいか分かり、意欲的に表現に取り組む姿が見られた。

(2) 今後の課題

- ① 本実践では、社会科の学習内容と関連づけ、創造的想像表現を促す題材を設定した。今後は社会科だけでなく、どのような教科の学習内容と関連づけて創造的想像表現を

促す題材が設定できるかを考える。

- ② 「表したいことを絵や立体に表す」活動（平面的な表現）だけでなく、他教科等の学習内容と関連づけた「作りたいものを作る」活動（立体的な表現）の題材設定のあり方を探る。
- ③ 支援の内容や支援の仕方について、さらによりよいものを探る。